

「棒」にある感情

——国語教材としての『棒』の可能性——

佐藤 清納

はじめに

安部公房作品は高等学校の国語科では教科書教材として定番化している。内容としては『赤い繭』『鞆』『棒』などの小説がやはり多いが、エッセイや『良識派』のような小品も掲載されている。二〇一三年三月二十七日付の朝日新聞朝刊では、二〇一二年度の教科書検定結果として、現代文A、Bに登場する作家の名前を掲載数順に並べた表を發表している。これを見ると、安部公房は第四位で掲載数は一〇冊となっている。ちなみに一位が夏目漱石（二〇冊）、二位中島敦（二〇冊）、三位森鷗外（一四冊）で、教科書掲載定番の芥川龍之介は国語総合の教科書に多く掲載されているためこの表に載らないのだとすると、夏目漱石、芥川龍之

介、森鷗外、中島敦という国語教科書におけるいわゆる「天王」の次点に安部公房が位置することになる。

安部公房の特に小説が好んで取り上げられるのは、「文体・描写・構成などの面で優れており」（「高等学校改訂版現代文」第一学習社・二〇〇八年）、抽象的な独特の世界観によって多様な解釈を可能としている点である。そして多くの指導書が指摘しているのが、現代社会と結びつけ、「現代につながる意味があるとしたらどのようなことなのか」（「精選国語総合現代文編〔改訂版〕」筑摩書房・二〇〇七年）を考えさせられる点である。

しかし、安部公房作品を授業で扱うことをためらう教員も多い。そこには、抽象性を含んだ作品であるが故にこの作品で「何を」「どう」教えるか、教材研究及び授業構成が

難しいという部分があると考えられる。また、扱った場合でも、多様な解釈が可能としながら、どうしても指導書をもとにした、もしくは教員自身の一定の解釈に帰結させてしまっているのではないだろうか。

そこで、本稿では教科書教材として定番化している作品をもとに、先行研究及び各教科書会社の指導書の内容を検討し、解釈や指導における問題点や不足部分を浮上させ、それらを解消可能な授業開発を行いたい。

なお、今回取り上げるのは、『棒』という作品である。『棒』は、一九五五年七月号の『文芸』に発表された、人間の変身モチーフにした短編小説である。『棒』以降は『砂の女』（一九六二・六、新潮社）など変形譚から離れた作品を執筆しており、また、『棒』の中でも学生が、「ぼくは、標本室で、ずいぶんいろんな人間を見ましたけど、棒はまだ一度も見たことがありません」と発言していることから、この標本室にはこれまで安部公房作品の中で、植物や繭や様々なものに変身した人間たちが並べられていることが想像できる。したがってこの作品を、初期に多く執筆された変形譚の総決算ということができよう。

本作品は、阿武泉監修『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 13000』（二〇〇八・四、日本アソシエーツ）によると、高等学校の国語教科書に初めて採録されたのが一九七二年度版の筑摩書房の「現代国語一」であり、その後右文書院、学校図書、第一学習社の教科書に相次いで掲載され、二〇〇八年までに合計一八回登場したことになっている。これは安部公房作品の中では、『赤い繭』に続く採録数だ。

また、本作品は二〇一二年度時点では第一学習社と筑摩書房の現代文の教科書に掲載されており、教育庁指導部の調べでは、都立高等学校及び中等教育学校（後期課程）用教科書教科別採択結果（教科書別学校数）によると、第一学習社の二〇一二年度におけるシェア率が二五、六パーセントで一位、筑摩書房が一、六パーセントで五位、あわせて三七、二パーセントのシェアになる。最も学習者の目に触れる機会が高い教材でもあるため、今回は本作品について研究をすすめた。また、授業開発の成果として早稲田学院高等学校で授業実践を行ったため、その結果も分析し、本稿にまとめた。

一 先行研究における『棒』解釈

『棒』に対して行われてきたこれまでの解釈は、主人公「私」の本質が「棒」であり、都市が人間を疎外するという構図を示しているものが多い。例えば小林治は、この作品には「眼には見えない現実の本質を書くというアヴァンギャルドの理念が反映」されているとした上で、

ありのままに現実をとらえるという通常のリアリズムを離れ、変身という飛躍による反リアリズムの装置を仕掛けることで、曖昧模糊としていた自身の現実の本質、すなわちここでは内面の身体性を一挙に、はっきりとした形として露出して、明視化したのである。

と論じている。「内面の身体性」とは、人間という身体に寄り添ってある心の身体感ではなく、「自身が物質としてだけ存在することを強要されているということに対応したどんな感じとも表現する術を持たない心の身体感」であると説

明している。小林が指摘するように、この作品は「私」がもともと主体的な人間ではなく、他人に使用されることでその存在意義を発揮する道具的存在であつたために、「棒」に変身することでその本質が露見したと解釈されることが多い。これらの解釈は安部公房自身のバックグラウンドや言説に依るところが大きいと思われる。例えば、初の評論集『猛獣の心に計算機の手を』（一九五七・二二、平凡社）の後書きには、「私自身、実存主義からシニールリズム、それからさらにコミニズムと思想的にも方法の上でも大きく三転した」と書かれている。彼の思想や手法の変遷は必ずしもこの順番の通りではなく、各要素が混在しながら作品として表れているのだが、こうした作者自身の思想や当時の活動状況などを考慮した実証的な解釈が一般的だったのである。また、『棒になった男』の解説として安部公房本人は次のように述べている。^[5]

このテーマは、一見して分るとおり、他人から使用されることでしか存在理由をもたない、棒のような男は（棒は道具の原型である）、棒であるということ自体によって、

内部から罰せられるものだという、現代社会における人間疎外をえがいたものだ。(略)べつに奇をてらったわけではなく、私にはやはり、人間が棒になるという、この非現実的だがしかし想像力に訴えてくるイメージが、テーマの展開に一番ふさわしく思われたからなのだ。

このように安部公房自身が作品のテーマを語っているのであるが、実はこれは小説『棒』ではなく、小説が出版された二年後に作られたラジオドラマ『棒になった男』の解説なのである。話の流れ自体に大きな違いはないが、ラジオドラマの方では、「先生」と「学生」の代わりに「変な男」と「助手」が登場する。小説では二人の学生が掛け合いをしていた場面を「変な男」と一人の「助手」で行っているのである。また、男女に拾われて終わるというラストなど、細部を見ていくと、解釈に影響すると思われるような差異が出てくる。この言説に関して小林美鈴は、教科書「高等学校現代文」(第一学習社)の指導書で同部分が「作品の読解にあたり、参考になろう」と書かれていることや、船橋健一がこの文章を『棒』について書かれた自己解説^[1]

であると述べていること^[7]に対して、小説『棒』を読む際に、安部公房の別の作品を「棒」の読みの根拠として持ち込むことへの疑義を呈している^[8]。確かに「参考」にはなるかもしれない。しかし、この言説はあくまでも六〇年前のものであり、時代は刻一刻と変化を続けている。今こそ作者を離れて、現代だからこそ見えてくる新しい読み、解釈があつてしかるべきではないか。

問題はそれだけではない。本文の内容を検討していく場合、例えば、山口昌男は先生の「つまりこの男は棒だった」という発言に対して、「生前この男(筆者注・主人公「私」のこと)が対自存在の主體的自覚なしに對他存在にのみ生き使用された道具的存在であつたことを開示している」と論じている^[9]。このように、これまでの先行研究は先の安部公房の言説と重なるように、主人公「私」が他人に使用されるだけの主体性がない人間だと予め規定してしまい、誰も理不尽に「棒」に変身し罰せられた「私」の心理面を見ようとしていないのだ。

小林美鈴は同論文の中で、^[10]

先生の結論は、対自存在の欠如という一面で「この棒は、棒であった」と結論づける。そしてこのような分析と結論を申し渡された「私」は、人間としての主体性を奪われ、独白さえも発することができず、「この棒は、棒であった」というトートロジーの中に絡め取られていくのである。

としているが、「私」の主体性と他者関係の喪失を二重三重に語り」というのが、「棒」になったことでの喪失と、先生に判決を申し渡されたことでの喪失を指すものであるのならば、先生が結論を下すまではなんらかの主体性が存在したことになる。初めから主体性のない「棒」のような人間として扱われていて、主体性や感情を無視されることが多かった「私」。その中で小林が「私」の主体性のあり方がストーリーの進行に伴って変化することを指摘したことは重要だと思われる。しかし小林も、先生が結論を下した結果「私」が主体性を失ったと述べてはいるものの、ではその時点まで持っていた彼の主体性とはどのようなものだったのかということには言及していないのである。

「私」の主体性がこれまで無視される傾向にあった理由はいくつか考えられる。まず一つ目は作品全体の匿名性である。「私」、「子供たち」、「先生」、「学生」と登場人物が全て普通名詞で呼ばれていて、その抽象的描写が普遍性を効果的に表している。固有名詞を出さないのは安部公房がよく使う手法である。佐々木基一はこのことについて次のように述べている。^{〔1〕}

彼（筆者注・安部公房のこと）の主人公のほとんどすべてが孤独な人間であり、（略）いずれも人間連帯から切りはなされて一個のアトムと化した無名の人間、任意の存在である。いわゆる小説の主人公、ヒーローになるには向きな、あまりに無性格な人間たちであり、抽象人間たちである。（略）そして任意の存在と化した絶対的に孤独な人間の抽象的な主観性と、個人の手におえない存在と化した外部世界の抽象的な普遍性とを、直接対置するところに、安部公房の独特な構図がある。

抽象的な存在を抽象的なまま捉えることで見えてくる

構図もあるだろう。普遍性を導き出すなら必要なことである。しかし、どうしてもこのような観点を持ちだすと、「個人」という主体の内面に入り込むことは難しくなる。また、別の問題もある。作品中における先生と学生の存在である。先生の容姿は「白い鼻ひげを蓄え、度の強い眼鏡をかけた、いかにももの静かな長身の紳士」と「私」の目線で語られているが、実はその鼻ひげは「附けひげ」だったことが分かる。「眼鏡」に「附けひげ」といういかにも如何わしく権威を揶揄しているともとれるような様子の先生に対して、学生たちは、「背丈から、顔つきから、帽子のかぶり方まで、まるで双子のように似かよっていい」るのである。このように生命感や生活感を伴わない無機的な人物として描かれ、非日常の世界が効果的に表されている。その無機質で非現実的な世界に「棒」になった「私」が埋没してしまい、彼ももともと無機質な「棒」であったような感覚になるのではないだろうか。これがこの作品の効果であることは間違いないが、「私」が主体的な人間でなかったからといって感情もないことにはなるまい。平凡な人間にも感情はあるのである。「棒」になる前の「私」の登場する「現実的な世界」

では、デパートの屋上から街を「うっとり」と眺め、湿っぽい空気に「いらだたし」い気持ちにもなる人間なのだ。だからこそ、学生の一人が立ち去る前に、「この棒は、ぼくらの云うことを聞いて、なにか思ったでしょうか？」と尋ねているのである。これは作者から読者への想像を喚起するための投げかけである。「私」の内言が描写されていないが故に、本来ならば自由に想像を膨らませることができる部分なのだ。

そして忘れてならぬのは、彼は「棒」である前に「父ちゃん」であったことである。社会の中で主体的な人間関係を持つずに、人から使用されることで存在意義を見出すような人生を歩んで来たかもしれない。それでも誠実に、平凡に結婚をして子供を二人持って、休日にはデパートの屋上で子供たちのお守をするような男なのだ。もちろん子供たちに対して妙な腹立たしさを覚えていて、子供に呼ばれたにもかかわらずその声から逃れるようにしているのは、良い父親と言えるかどうかは別だが、彼なりの思いはあるはずなのである。しかし、「私」の父親としての側面に触れている先行研究は少ない。坂山雄一が、『新鋭文学叢書2

「安部公房集」^{〔1〕}のために書かれた、安部公房自筆の「年譜」より、

八月になって、急に戦争が終わった。(略)その無政府状態は、不安と恐怖の反面、ある夢を私にうえつけたこともまた事実である。父と、父に代表される財産や義務からの解放。

という部分をもとに、安部公房は「父」を「財産や義務」の代表として象徴的に見ていたとし、「棒」に変身した「私」は「父親」としての「財産と義務」の代表としての權威を失墜していくと言及されることがあるくらいである。^{〔13〕}しかし、「私」が墜落していく場面で何度も「父ちゃん」と子供たちが叫んでいることや、最後の場面でもまだ子供の呼び声が聞こえているような様子から、彼の父親としての權威がすぐに失墜していくとは考えにくい。むしろ落下する父親を目前にしながら父親の名を叫ぶ子供たちからは、父と子のこれまでの関係が推し量れるだろう。

一方、最後の場面であるが、ここに出てくる「父ちゃん」

の呼び声は、自分の子供のものと「私」は決定できてはいない。

「父ちゃん、父ちゃん、父ちゃん……」という呼び声が聞えた。私の子供たちのもうでもあったし、ちがううでもあった。この雑踏の中の、何千という子供たちの中には、父親の名を叫んで呼ばなければならない子供がほかに何人いたって不思議ではない。

最終段落は「私」個人の心情を語っているわけではなく、ナレーシヨンのような客観的な語りによって、自分だけの問題ではなく大勢の人が同じような状態であることを示唆するような、問題を所在を拡大、普遍化するような語りになっている。ここにはすでに彼個人の感情はないように見える。しかし、一連の出来事を体験した彼の思いや考えがこのような結論を述べさせたことは間違いない。であるならばこの作者から読者への問題提起とも言える最終場面を考える場合も、「私」の心情を想像することで、より「私」という存在を読者自らの身に引きつけて考えることができ

るはずなのである。

このようにこれまでの先行研究では父親としての「私」の存在と、その主体性や感情が無視されてきたことを指摘してきた。それでは、実際にこの作品を授業で扱う場合にはどのように指導することになっているのだろうか。続いて指導書の内容及び従来の授業実践例について検討する。

二 指導書の方向性と従来授業実践

第一学習社の「改訂版高等学校現代文」(二〇〇八年度版)の指導書では、教材のねらいとして「人間としての生き方を問う小説でもある」「自分を、社会を考えるきっかけとすることができよう」と書かれているのだが、指導計画案には自らの身に引きつけて考えられるような発問が十分ではない。先述の通り、匿名性を持つ抽象的な文学作品のため学習者が共感しづらい部分があるだろうと思われるのだが、指導の仕方によっては、本文自体の読解と「自分を、社会を考える」ことの間に飛躍があり、理解に苦慮する学習者が出てくると考えられる。また、「単元の主な学習目標」に

「多様な解釈を試みることで、各自の読書行為へと反映、発展させてゆく」とある一方で、「学習指導の要点」には「周到に計算された構成に着目し、作品の細部と全体にみる相互関係をとらえることで、的確な主題の理解をめざしたい」とも書いている。その「的確な主題」とは何かというところ、

現代の都市社会を生きる人間は、ある一定の目的のために使用されることでしか、自分の存在理由を持つことができない状況にさいなまれている。「私」は、棒のような存在として生きてゆくことで、社会に許容されるのであるが、同時に「私」が「私」であることへの主体的なかわりを持つ、人間としての本来的なあり方からは疎外されるのである。

とある。「人間としての本来的なあり方」と何なのか、そして「疎外」の言葉の説明もない。もちろんマルクス主義の影響を受けた安部公房が疎外論を援用してこの作品を執筆した可能性は高く、当時の時代性としても、急速な都市化が進む中で人間疎外の状況を人々が理解し受け止めたこと

いう事実もある。しかし現代においてこのような主題を「的確に把握」するのは、高校生には困難である以上に、教員もこれではどのようにその主題を教えればよいのか分からないう。しかもこのような主題を通して、どのように「多様な解釈を試みる」ことができるのだろうか。解釈が限定されてしまうことは言うに及ばないであろう。むしろ、あえて主題を把握することを授業に組み入れるのであれば、「多様な解釈を試みる」ことで主題も多彩に設定し得るということを学習者には気づかせるべきである。

ここで多様な解釈のもととなるのが、「私」の心情である。ところが、「私」の人物像の考察はさせるものの、本文中には明確な内言がほとんどないためか、心情を把握させるような発問は用意していないのである。

筑摩書房の「精選国語総合現代文編「改訂版」」(二〇〇七年度版)の方はどうかというところ、こちらにも主題が用意されているのだが、「抽象的かつ寓意的に見える分、主題のとり方が読み手によってさまざまに異なる」と断ったうえで、

他人に言われるままに生きていた男は、その本質にふ

さわしい棒の姿に変身した。死者を裁くに値しないと判断し、その場に放置するという刑罰を与えた。

としている。主題というより要約であり、このことからどういったテーマが浮かび上がってくるのかを考えるのが重要だと思われるのだが、そうすると「主題のとり方が読み手によってさまざまに異なる」ため記載しにくいのだろう。主題の例として適切なのか疑問である。また、「作品鑑賞」ではこのように述べられている。

まず、小説が「ある六月の日曜日」という、年を特定しない形ではじまっているからといって、この小説の舞台を無媒介に現代と接続し、「現代における人間疎外を象徴的に表している」といった一般的解釈を生徒に押しつけるようなことは避けたい。(略) この小説が発表された一九五五年は、今まさに崩壊の途上にある五五年体制のスタートした年であり、「もはや戦後ではない」という経済白書のことばとともに、高度成長を支えたサラリーマンたちによる社会均質化が拡大していった時期

である。こうした状況下でのサラリーマンの匿名性・愛
動性のメタファーとして棒は機能しているのとおりあえ
ずは言うことができるだろう。

確かに「一般的解釈を生徒に押しつける」ことには筆者
も反対である。しかし、せっかく普遍性を持たせるように
「ある六月の日曜日」とあるのに、なぜ「無媒介に現代と
接続」してはいけないのか。もちろん高度経済成長期に均
一的で受動的なサラリーマンが増えた事実はあるが、生
徒の想像する「現代のサラリーマン像」は、この作品の「私」
のイメージと全く違うというのか。あえて六〇年前の社会
状況を理解させずとも、生徒は「私」の「サラリーマン」
として人物像や心境を十分に想像できるのではないだろう
か。もちろん事後指導として作品発表当時の状況を振り返
ることは意味があると思うが、抽象的文章であるからこそ
可能な、現代との接続を活かさない手はないだろう。

全体としては、「ある程度幅を持った解釈を許容し」と
配慮が見られ、「私」の人物像を变身前と変身後（先生と学
生のやりとり後）の二度に渡って考えさせる指導例が提示さ

れるなど、「私」について考えさせる機会がしっかりと設け
られているが、「私」が「どんな人間か」を考えさせるにと
どまり、「私」が「どのように考え感じたか」を問う発問は
やはりなかった。

もちろんこれまで指導書の内容にとられない授業実
践が、様々な工夫のもと行われてきたのも確かである。例
えば、牛山睦子は、特に本文読解の講義はせずに、感想の
交流をし合いながら自己の読解を深めていくという授業実
践を行っていた¹⁴。

まず、「実践のねらい」として、「作品を多面的に読み、
寓意等の意味を考える」ことを挙げ、そのために「作品内
容について、あらかじめ用意した設問について感想を記し、
それらを発表することによって、自由に意見交換を行」い、
これによって「自他の読解力の相違を知り、読解力・記述
力のさらなる向上と伸長を図る」としている。この場合、
教師から解釈を示すことはしないため、様々な解釈が成り
立つ可能性があるが、その時に大切なのが、「あらかじめ用
意した設問」の内容である。この設問は大きく分けて三つ
あり、一つ目が「私（父ちゃん）はどういう人間か」、二つ

目が「学生と先生について（三人の役割）」、そして三つ目が「「棒」とは何のたとえなのか。なぜ「棒」になったのか。「棒」論を自由に展開せよ」というものであった。学習者の記述が一部抜粋ながら記載されているのだが、気になるのがやはり「私（父ちゃん）はどういう人間か」という設問への記述である。「平均的な父親」「普通の人」「平凡」「サラリーマンのように会社組織の上司に付き随うような役職にあった人」「道具みたいな役割しか果たさない人」などの言葉が並び、類型化して考えてしまうために「私」の「人間味」のようなものを感じ取っているような生徒はいなかったようである。しかし、「「棒」論を自由に展開せよ」という設問に対し「「棒」とは現代を生きる男の例えだ」と思う。（略）確かに家庭を築いて、子供がいて、仕事があつて不自由なく生きるということは幸せなことだ。けれども、周りと似たような父親で、会社でも上司に言われるがままで……、という生活の中で男は自分というものをどのようにして見出すのか」と、「私」の内面にまで近づこうという姿勢も見て取ることができた。これは主体のない「棒」のような「私」ではなく、「物を考え感じる」ことができる、生

身の「私」を捉えようとしているのである。このように内面まで踏み込んで考えることができれば、自ずから自分や社会との関係に思いを馳せることも可能であろう。もちろん類型化して考えても抽象思考を鍛えることはできる。客観的に考えることも必要だろう。しかし、平凡な「私」が理不尽な状況に追い込まれた際の心情を推察することで、さらに解釈が広げられ、深められ、新たな解釈が生まれるのではないかと考えるのである。

三 早稲田学院高等学校での授業実践

本作品は見方によって多様な解釈が成り立ち、その寓意性が生徒の抽象思考を養うために有用であることは前述の授業実践からも指摘できる。その上で、今回早稲田学院高等学校での実践で計画したのは、まず「父親としての「私」」を認識させ、より詳細で人間的な人物像を把握させることと、「棒」になるという理解不能な変身から不条理な裁きを受けるという理不尽な出来事を通して「私」がどう考えたのかを想像するという二点である。一コマの投げ込み授業

であるため、事前に本文と予習プリントを配布し、予め「私」と「学生」の人物像を考えておいてもらった。本時の授業では、予習部分の意見を出してもらい、板書でまとめながら、「私」の存在には社会的側面と家庭的側面の両方があることを捉えさせた。社会的側面というのは、「私」が人に使用されることで存在意義を保っていた道具的存在であり、言わば現代の「サラリーマン」に通じる存在であるということである。学生と先生の会話から想像できる部分だ。対して家庭的側面というのは、「私」の「父親」としての存在である。これは、子供たちとのやりとりや最終段落から想像することができる。

そして具体的な人物像をまとめたのちに、「私」の心情を考えさせる発問として、「私」は「棒」のままでもいいか、人間に戻りたいと思っただか、どちらでもないか」という三つの選択肢を用意し、理由も考えさせた。個人でまず考え、班及びクラスで意見を交流し、もう一度個人で考えるという流れにした。そのことで、多様な解釈を味わい、自己の考えをより深められると考えたからだ。

実践したところ、やはり多様な解釈が得られた。「棒」

のままでもいいと考えた「棒派」の意見としては、「人間として生きるのもつらいから棒でいたい」「人間でいるのは面倒だ」「同じように使われるなら棒の方が責任がなくて楽だ」と思ったのではないか」という、「私」が人として生きることに疲れたという解釈で意見を考える者が多かった。この場合は子供にも使用される立場である父親像を描いている者もいた。

一方人間に戻りたいと考えた「人間派」からは、「いくら棒のような人生を送っていたとしても、実際に動けず言葉も出すことが出来ない状況になって、改めて人として生きたいと思っただのではないか」「最後まで子供の叫び声が聞こえているのは、子供たちのために人に戻りたいと思っただかでは」という意見が出た。

そして「どちらでもない派」は、「生前も何も考えずに生きてきたのだから、棒になっても何も思わない」「先生や学生たちの発言に対し何も感じていない様子であり、最後の場面では子供たちの叫び声も自分の子供でもそうでなくとも良いようで、感情自体がない」という意見等があった。

本文の内容に沿って考えるように伝えたが、それでもこ

のように多岐に渡る読解が行われた。まず、父親としての「私」の人物像を捉えさせることで、子供との関係や「赤ちゃん」の叫び声を聞いての「私」の反応などに注意して意見を考えさせることができたのは成果である。もちろん解釈と想像が混じっている意見もあったが、授業の感想を見ると、多様な解釈を交流することで、それぞれの考え方、捉え方の違いを味わう事ができたようではあった。他の意見を吸収することで読みを深めているのは、初めに個人で考えた時と、班やクラスでの交流の後に再度考えた場合で意見を変えた者が多数おり、理由もより具体的に書かれていることから判断できる。心情を問うたものの「何も思わなかった」という意見も一定数あり、こうした意見も大切にしたい。もし感情を持たないと考えたのであれば、「なぜ感情がないのか」「感情がない人間は本当にいるのか」などと問いを発展させることによって、さらなる想像を膨らませることができよう。今回は、一コマの授業だったので、そういった考えを深化させるような発展的な発問や、解釈の仕方によって物語の世界観が全く変わってくることを、「私」の心情を考えることが物語全体の理解の仕方に関わ

ってくることでをしつかりと理解させるに至らなかったため、今後の授業開発の際の課題としたい。

おわりに

『棒』は、学習者から見れば一見「わけのわからない」作品である。それは抽象的な描写であったり、現実とは離れた不条理な世界を描いているからなのであるが、この非現実的かつ不条理な世界は小説だからこそ描き得るものでもある。学習者がこれまで触れてきた小説とは趣を異にしているため、初めは共感しにくいかもしれないが、逆に読書の面白さを伝えるには最適な教材である。小説の楽しみ方は人それぞれであり、解釈には幅があること、そして自分なりの解釈をすすめながら読むことの楽しさを『棒』やその他の安部公房作品を通して知ってもらいたい。そのために必要なのは、抽象的な文章をいかにして自分に引きつけて考えられるかが重要である。登場人物を無機質な類型的な人物として浅く捉えるのではなく、細かい描写から「血が通った人物像」を想像するのだ。今回の授業実践では、

そのために特に父親としての「私」の存在を強く意識させた。本来であれば、「棒」に変身し、分析され、裁かれ、放置されるという一連の出来事を通して、「私」がどう思ったのかを、発問としたいところなのだが、限られた授業時間の中で一定の解釈を導き出すということと、解釈の多様性を分かりやすく知ってもらうために、あえて三つの選択肢を用意した。これはある意味解釈を狭めかねないので、やはり、本来は「私」はどう思ったか」というオープンな発問によって学習者の想像力を刺激するべきだと考える。その際にどのような意見を学習者が導き出すのか興味深いところである。

〔注〕

1 教科書に採録される際に、本文の送り仮名や単語の変更がなされている。(例)「盲」↓「盲人」など。なお、「棒」本文引用は『安部公房全集5』(一九九七・二二、新潮社)に依った。

2 『デンドロカカリヤ』(一九四五) ↓植物に変身

『壁——S・カルマ氏の犯罪』(一九四六) ↓壁に変身

『赤い繭』(一九四六) ↓繭に変身

『水中市』(一九四七) ↓魚に変身

3 中等国語科インターンシップの一環として、二〇一三年九月二七日の四時限目の「文学?!」という三四名の混合クラスで授業を行った。

4 小林治「昭和二十年代の安部公房短編作品について(三)」『駒沢短大』、二〇〇一・三二

5 安部公房「アヴァンギャルド」(現代演劇講座別巻『ラジオ・テレビのドラマ』一九五九・二) 引用は『安部公房全集9』による。

6 テレビドラマ「棒になった男」は一九五七年一月二十九日二〇時から三〇分間文化放送の「現代劇場」の番組で放送された台本は一九五八年、雑誌「新日本文学」一月号に掲載。一九七〇年六月に大光社より刊行の「現代文学の実験室」安部公房集」に収録。第二二回芸術祭参加作品(一九五七年)。一九五七年度芸術祭奨励賞受賞。

7 船橋健一「現代文学を、どう教材として扱うか。——安部公房『棒』を中心にして——」『愛知大学国文学』、一九八三、三二

8 小林美鈴「教室におけるテキスト受容のあり方——安部公房『棒』をめぐる——」『日文協国語教育』、二〇〇七・五

9 山口昌男「安部公房『棒』の文芸構造——実存的裁きを中心として——」『活水文学』一九八三・一〇

10 同8

11 『安部公房集』新潮日本文学46（一九七〇・二、新潮社）

12 安部公房『新鋭文学叢書2 安部公房集』（一九六〇・一二、筑摩書房）

13 拔山雄一「安部公房の「父親」たち——S・カルマ氏の犯罪」から「夢の兵士」へ」『近代文学 研究と資料』二〇〇八・

三

14 牛山睦子「◆近代の作品を読む 読解を楽しむ授業の工夫

——小説『棒』（安部公房）を教材として——」『月刊国語教育 研究』二〇〇八・八